

a chimpanzee. 9th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society.

- 10) 平林秀樹・宇野浩平・日野原正・栗山杉夫・小嶋祥三(1985):ファイバースコープによるニホンザル, チンパンジーの声帯運動の観察。第37回日本気管食道科学会。
- 11) 鎌田 勉・亀田和夫・小嶋祥三(1985):ニホンザル大脳聴覚野ニューロンのサルの音声に対する反応。第65回北海道医学大会生理系分科会。日本生理学雑誌 48, 35, 1986。
- 12) 小嶋祥三(1986):チンパンジーの聴覚, 音声知覚, 発声。日本音響学会音声研究会, 資料番号 S 85-88。
- 13) 小嶋祥三(1986):チンパンジーの聴覚, 音声知覚, 発声。日本音響学会音声研究会資料 S 85-88, 687~693。
- 14) 藤田和生(1985):霊長類における種の認知—感覚性強化による検討—。日本心理学会第49回大会, 発表論文集, 559。

社会研究部門

川村俊蔵・鈴木 晃・小山直樹・森 梅代¹⁾

研究概要

- 1) インドネシア・シボラ島における各種霊長類の社会・行動学的研究

川村俊蔵

スマトラ島の南シボラ島に生息する *Macaca pagensis*, *Presbytis potenziani* 他2種の観察を行い, 特に行動型からの系統的関係について資料を集め, 考察を行った。

- 2) スマトラにおけるブタオザルの社会学的研究

川村俊蔵・大井 徹²⁾

従来, 世界的に研究の遅れているブタオザルの長期的社会学的研究をスマトラにおいて続行した。

- 3) インドネシア・カリマンタンにおけるオランウータンの社会行動と社会構造に関する研究

鈴木 晃

東カリマンタン・クタイ保護区に生息するオランウータンの社会・行動学的研究を1983-84年に

引き続き, 本年は7カ月行った。森林内でのオランウータンの個体の布置構造を記録し, 社会構造に関する討論を行った。

- 4) インドネシア・クタイ国立公園の1982-83年の乾燥と大山火事の影響と霊長類の分布調査

鈴木 晃

1982-83年の東カリマンタンの乾燥と大山火事の影響と霊長類の分布状態に関する調査を行った。1983-84年の内陸の調査に引き続き, 今回はセンガタ川上流へのカヌーによる調査を行い, その概要を把握し, 従来の知見に新たな資料を加え, インドネシア政府に報告した。

- 5) 木曽研究林におけるニホンザルの群れの社会学的研究

川村俊蔵

ニホンザルに関しては, 木曽研究林S群の餌づけに成功し, ブラインドによる観察の結果, 成獣・亜成獣オスの全個体, 同じくメスの一部の個体識別を行い, 個体原簿作成にとりかかった。またA群の早春期の遊動のトレースを行った。

- 6) ニホンザルの地域個体群の動態と群れのスペーシングに関する研究

鈴木 晃

上信越ニホンザル研究林, 房総半島において, ニホンザルの地域個体群の土地利用, 個体群動態, 遊動におけるスペーシングの問題, オスの群れの離脱等に関する調査を継続して行っている。

- 7) ニホンザルのメスの繁殖成功率と個体歴

小山直樹

嵐山群の出産データーの解析から, 出産歴と初産年齢とは, 翌年の出産時期の早遅に影響を及ぼしているという傾向が見られた。また優位のメスが劣位のメスより繁殖上有利かどうかの検討を行ったが, 一定の規則性を見出すことは難しく, むしろ出産率の高低には, 母親の年齢という要素が強く働いていることをうかがわせる結果であった。

- 8) ニホンザルの社会的発達に関する研究

森 梅代

幸島群を対象にメスの育児行動, 離乳期の子どもと母親の相互交渉, 成長にともなう社会関係の変化などを中心に分析し考察している

総 説

- 1) 鈴木 晃(1985):環境科学辞典(荒木・沼

1) 教務職員 2) 大学院生

田・和田編, 分担執筆) 1015頁。化学同人, 東京。

- 2) 鈴木 晃(1985): 房総半島の自然—生物相にみられる孤島性とその保全—。遺伝, 39(6): 46-51.
- 3) 鈴木 晃(訳)(1985): チンパンジーの社会生態(キグリエリ著)。サイエンス, 15(8).
- 4) 小山直樹(1985): 霊長類のコミュニケーションと社会行動。霊長類学入門(江原・大沢・河合・近藤編), pp 220-242, 岩波書店, 東京。

論 文

- 1) 鈴木 晃(1985): オランウータンの社会構造。科学, 55(5): 308-314。
- 2) 鈴木 晃(1985): オランウータンとチンパンジーの社会構造。サイエンス, 15(7): 22-31.
- 3) Koyama N. (1985): Playmate relationships among individuals of Japanese monkey troop in Arashiyama. Primates, 26(4): 390-406.

報告・その他

- 1) 鈴木 晃(1985): 東カリマンタンの低地熱帯林の山火事。科学, 55(5): p314.
- 2) 小山直樹(1984): カニクイザルの社会行動。モンキー, No 200: 6-15.
- 3) Koyama, N. (1985): Socio-ecological study of the crab-eating monkeys at Gunung Meru, West Sumatra. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Human Primates, 4: 105-126.

学会発表

- 1) 鈴木 晃(1985): アフリカの森林帯・周縁地域における蝶類の分布地理学上の一知見。第22回日本アフリカ学会学術大会。

変異研究部門

野澤 謙・庄武孝義・和田一雄・峰澤 満

研究概要

1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し, 群内, 群間の変異性を定量化する。現在までにニホンザル44群, 総個体数約2,600頭の血液試料について, 35種の蛋白の構造を支配する計38遺伝子座の検索を行ってきた。このデータをもとにして, 統計的検討を加え, 繁殖単位間の毎代の移出入率, 遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い, ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。

2) *Macaca* 属サルの系統的相互関係

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルを含む *Macaca* 属サル各種から採血を行い, 前項1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝学的変異性を定量化し, それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し, それに数量分類学的手法を適用して枝分かかれ図を描く。それにより種間の近縁関係, 分化時間の推定等を行う作業を目下続行中である。60年度には, シシオザルの遺伝的変異性と他種マカクへの遺伝距離を推定し公表した。

3) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野澤 謙・庄武孝義

在来家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査によって, 家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と, 個々の家畜内で地域集団間の遺伝的分化の程度, 系統的相互関係の解明を行いつつある。60年度にスリランカと南インドの調査結果を公表した。

4) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野澤 謙

60年度のガン特別研究による海外調査によりカメルーンにてマンドリル, ドリルの試料が得られたので, これまでの試料をまとめてヒヒ類6種間の遺伝距離を推定中である。

5) *Cercopithecus* 属サルの遺伝的分化に関する研究

庄武孝義・野澤 謙

上述の海外調査によりカメルーンにてグリベットモンキーとパタスモンキー, エチオピアにてグリベットモンキーの資料を収集したのでこれまで得られている資料と合わせて地域分化, 種分化を遺伝距離でもって定量しつつある。